

====このお便りは私が担当している太極拳教室の皆さんに毎月お届けしています。====

今月のトピックス

階位試験の実施について

ご承知のように日本健康太極拳協会には上達の度合いを認定する下記のような階位制度があります。本年度はまず亀戸スポーツセンター教室できたる5月23日(火)の例会のさいに実施する予定です。すでに3名の方からお申し出をいただいておりますが、ご希望があればご相談ください。

他の教室も同様順次実施する予定です。

階位	基準	
初伝	一通り動ける	
中伝	初伝から1年以上稽古を重ねること	
奥伝	中伝から1年以上稽古を重ねること	
指導員	奥伝から1年以上稽古を重ね、指導助手や助手的経験を重ねること	
準師範	指導員から2年以上稽古を重ね、指導助手や助手的経験を重ねること	
師範	準師範から5年以上稽古を重ね、指導助手や助手的経験を重ねること	

健康妄語録

海外での臓器移植の問題点

厚生労働省研究班がこのほど「海外での臓器移植の実態と問題点」を報告書にまとめたと、4月22日の朝日新聞に『渡航臓器移植倫理面に懸念』と題して報じられていました。その記事によると、少なくとも2005年までに522人が海外で、心臓、肝臓、腎臓などの移植手術を受けているそうですが、問題点として、

- 1) 移植臓器の不足は先進国共通の問題で、発展途上国で移植を受けることは一般化している。
- 2) 中国では「死刑囚」の臓器移植が行われており、「臓器を提供しないと遺族が葬儀を行うことが出来ない」という状況がある。(つまり国家が死刑直後の臓器摘出を強制しているということか)
- 3) インドなどでは「腎臓1個の提供で4人家族が10年間生活できたり、起業資金を得たりすることができ、こうした犠牲を促進する傾向がある」

などと海外移植のおぞましい実態の一端をはじめて明らかにしています。本来の「臓器売買の禁止」という大原則はすでにもろくも崩壊していることがよく判ります。日本などでもサラ金業者が“腎臓一つ売ったらどうだい”などと返済を迫る脅し文句として使っているようです。

死刑囚のような絶対的弱者や自分の臓器を切り売りせざるを得ないほど貧窮している発展途上国の社会的弱者の犠牲の上に、数百万円から心臓移植であれば1億円ともいわれる経費負担が可能な先進国の患者の救済がなされているというのはなんともやりきれない皮肉で残酷な現実で、人間の劫の深さ、欲望の深淵を見る思いです。

旅をうたい拳を詠む

4月中旬に友人と長野、上田、別所温泉へ2泊3日の花見旅行に出かけました。幸い好天にもめぐまれ、松代、屋代(あんずの里)、上田城、塩田平、別所温泉と信州の春を満喫してきましたが、特に印象の深か

った塩田平の古刹巡りなどで作った歌のいくつかをご紹介します。

鎮魂の桜もひそと咲くからに黙し^{もく}つつ見る遺作の数々
(戦没画学生慰霊美術館・無言館)

未完成と気付かぬほどに姿良く前山寺の塔萬緑のなか
(前山寺・重文三重の塔)

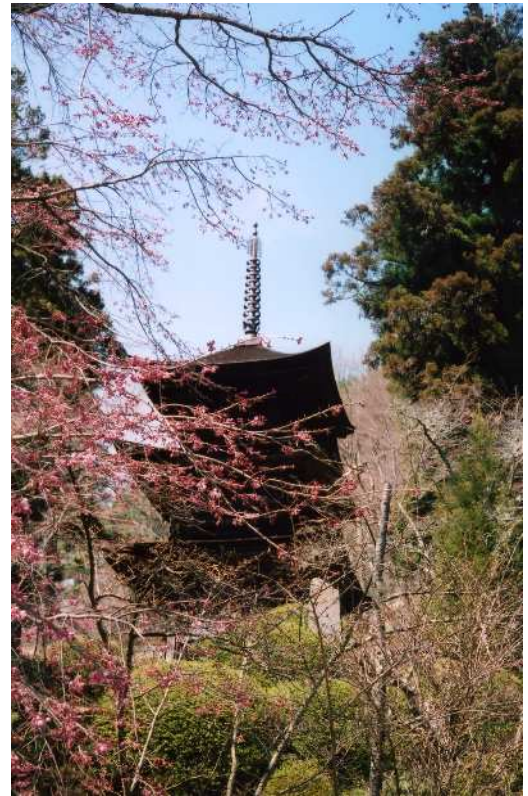
経を誦^ずし桜愛でつつ登りたし龍光院の長い参道
(龍光院)

独^{とっこ}鉾山の懐深き中禅寺花に誘われ鶯の鳴く
(中禅寺・重文・薬師堂)

見返れば桜と梅を待らせて人待ち顔なる国宝の塔
(大法寺・国宝三重の塔・写真右)

異形^{いぎよう}なる八角の塔凝然と時空を越えてなおも佇立す
(別所温泉・安楽寺・国宝・唐風三重の塔)

温泉^{ちようず}の手水^{すず}で^いそぎ^{がき}観音の斎垣に朝の太極拳舞う
(別所温泉・北向観音)



再掲・用語解説 甩手 (スワイショウ)

教室で初心者の方が必ず質問するのが、この変った字とその意味です。「腕をポイと振る」という意味ですと説明していますが、“腕を振る”という筋肉の力を知らず知らず使って腕を“自分で廻そうとする”人が多いようです。腕と肩のすべての筋肉を完全に緩めて、上体のねじりとある程度のスピードによって遠心力が働き、肩を含む腕全体が“振り廻される”というのが正しい甩手です。廻った腕は背中を叩いてその反動がまた回転のエネルギーになります。軸は中心にあるのが基本ではありますが、回転が大きくなりスピードが出てくるとこれではちょっと窮屈になりますので、すこし体重移動を加えるとスムーズで、膝も楽になります。簡単な動作で、一人でも、またどこでも、いつでも出来ます。血行がとても良くなって、肩こりや腰痛の予防、内臓機能の改善に効果がありますので、ぜひ“毎日”実行して下さい。

遊印遊語 群山春意

佐藤春夫の詩集『佐久の草笛』の中の詩の題名を彫ったものです。副題として“山将に笑わんとす”とあるように、佐久の春景色をうたった詩です。

佐藤春夫は昭和20年4月に東京から長野県の佐久に疎開しましたが、昭和21年8月にはこの詩集を刊行していますので、多分疎開直後に作った詩と思われます。

「山笑う」は俳句の季語にもなっていますが、残雪を背景にした新緑と山桜や山つつじの彩りは自然の生命力が一気に爆発したようで、まさに「山笑う」とは日本人らしい感性から発した見事な言葉だと思います。

一方、佐藤春夫は漢詩にも造詣が深く『車塵集』や『玉笛譜』など、漢詩を翻案した名詩集を刊行していますし、詩の題名にもしばしば中国の詩句から取ったと思われる熟語を使っています。或いはこの「群山春意」もそのひとつかも知れません。出典は分かりませんが、いずれにしても残雪と新緑の山並みを想起するにふさわしい言葉ではあります。

